

# 教宣 せぶん

## 去り行く仲間たちへ

10月7日以降のたたかいを冷静に振り返ってみると、私たちと経営、お互いの出方に相手が予想しえなかった動き、将棋で例えるなら「予想外の一手」があり、それがいまこのたたかいに大きな影響を及ぼしていると感じます。

まず、私たちの「予想外の一手」は2月2日の提訴です。経営は、私たちが裁判に訴えることがあるとしても、それは実際に不利益を被ってから、すなわち2007年の7月以降だと想定していたはずです。ですから、現在の経営の裁判での主張も「実際に不利益を被っていないのだから」「協議中なのだから」という言い訳に終始しています。私たちには、来年の7月以降になってからの提訴では遅すぎる、それまでに勝訴判決を勝ち取らなければ意味がない、充分勝ち取れる、という判断があり、2月提訴に踏み切ったわけです。私たちの「生活」や「雇用」を考えれば正しい判断ですが、経営は間違いなく想定外だったはずです。

その私たちが指した「予想外の一手」に慌てた経営も予想外の一手で応えました。それは、提訴したことを理由に「転身支援金を撤回する」という報復の一手です。誰の目から見ても「差別」だとわかるこの報復の一手を、まさか人権を啓発する会社が、コンプラを経営理念の真っ先に掲げる会社が、堂々と指してくるとは思いませんでした。そして第三者機関である都労委の勧告を堂々と無視し、都労委自体の存在をも軽視しています。よほど経営は「2月の提訴」に怒り心頭だったのでしょう。よほど想定外だったのでしょう。そこには経営のなりふりかまわぬ強引さ、破れかぶれさが見て取れます。「せぶん」ではこの予想外の一手を、墓穴を掘る「大悪手」だと報じましたし、いまでもその確信はまったく揺らいでいませんが、この「大悪手」によって私たちのたたかいは、より色々なことを考えなければならなくなりました。

いま、私たちの仲間が代理店になる道を選ぼうとすれば、私たちの組織から脱退して改組しなければ転進支援金をもらえないという構図がつくられています。このこと自体、「差別」以外のなにものでもなく、理不尽極まりない犯罪とも言える行為なのですが、それがまかり通ってしまう体制が現存します。冷静に、客観的になって考えれば、「おかしい」と誰もがわかるはずなのですが、「おかしい」と声を発しないばかりか、それに加担してしまう、長いものに巻かれている者たちもいます。この会社に

働くものは、経営が白と言えれば黒いものでも白く見えてしまうのでしょうか？ 道徳とか、良識とか、もちろん人権とか法律に照らし合わせてみて、自分の目で事の良し悪しを判断できる者はいないのでしょうか？

もし、来年の7月以降に私たちが提訴する、あるいは本年の5月以降に提訴していたとしたら、それが不利益かどうかは別にして、私たちの組織の中にいる「支援金をもらって代理店になる道」を選ぼうと思っていた一部の者は、私たちの組織に背を向けず、労組の面接などを受けずして、もっと簡単に支援金を手にできたのかもしれない。

しかし、これだけは見誤らないでもらいたいと思います。それは、私たちの「主張」と経営の「出方」とどちらが真っ当か、ということです。これはいままでの自らが経験した、たたかひの経過を振り返ればわかるはずで、正しい方が虐げられ肩身の狭い思いをし、正義面した権力者が堂々と悪事を繰り返していく姿は、どう見てもこの会社に似つかわしくありません。自分の一生を振り返った時に、後悔したくありません。だから私たちは最後の最後までたたかひます。このことは忘れないでもらいたいと思います。

会社の掲げる理念は立派なものです。地球環境の保護や人権を大切にすることを素晴らしいと思います。しかし、現経営がその理念や理想像についていけてないのではないのでしょうか。目先の利益や保身に走り、全体像が見えていないのだと思います。「会社」と「経営」は決してイコールではありません。この会社の掲げる理念にふさわしくない、ハダカノ王さまには「ノー」を突きつけ、良識ある、この会社の経営理念を真に遂行できる「本物」に登場願いたいものです。